

それでは、**創世記**の序論、イントロダクションのパート2を今からお届けしたいと思います。前回学んだ通り**創世記**というのは聖書 66 巻の初めの書で、その 66 巻、残りの 65 巻の土台となる非常に重要な書であって、私が尊敬して止まないヘンリー・モーリスという人が、「これまで書かれた書物の中で最も大切な書物こそ**創世記**である。」ヘンリー・モーリスという方は、創造論ミニストリーの草分け的存在です。ICR という団体です。Institute for Creation Research というアメリカに拠点を置く世界的な創造論ミニストリーの団体で、日本にもその支部がございしますが、私もアメリカでそのミニストリーを通して創造論について学びました。特にヘンリー・モーリスという人と、そして副所長のデュウェイン・ギッシュという博士たちからは、本当に目を開かれるような科学者の視点から創造論というものを教えて頂きました。最近見たニュースでは、韓国では進化論よりも創造論の立場で生物学なり科学を教えることが政府として方針が決まった、ということも聞いたので。隣の韓国は、クリスチャン人口が40%とも言う人もありますし、少なくとも20~30%は間違いないと思いますが、キリスト教国家と言っても差し支えないぐらいです。歴代の大統領もほとんど最近はまだクリスチャンの方ばかりでありますし、また世界最大の教会も擁しているような、もうそこかしこが教会だらけと。一つのビルの中にもいくつもの教会が入居しているような、そんなところですよ。そして、そこでは科学は創造論に基づくものとしてこれから教えられていくようになるということをお聞きしました。

私たちが今この**創世記**を通してすべての起源(初めです。) **創世記**という書物の書名そのものが「**初めの書、起源の書、誕生の書**」という意味です。ヘブル語では『ベレシート』と言って、それが「**起源**」という意味であります。ギリシャ語では『**ゲネシス**』と言って、それは英語の“**Genesis**”の語源となっています。『猿の惑星ジェネシス』という映画がありましたけれども、**創世記**という意味です。猿の惑星は猿からということなんですが、私たちの惑星は猿からではありません。神が私たち一人一人を特別な意図を持って、目的を持って人間として造りました。最初は無機物であって、それからアメーバのようなものになって、いつの間にか下等生物から高等生物になって、猿から類人猿、そして人間に進化したというのは進化論の教えで、進化論の教えというのはこの**造り主、創造主**を全否定した1つの信仰体系と言って差し支えないと思います。無神論者の宗教は、進化論なんです。そして、その宗教は妥当かどうかということも、今日この時間を通して皆さんに考えて頂きたいと思います。その一方で**創造論**というのも、これもむしろ科学というよりも宗教です。ですから、まず皆さんに押さえて頂きたいことは、『**進化論 対 創造論**』というのは、『**科学 対 宗教**』という構図ではなくて、実は『**宗教 対 宗教**』です。どちらの宗教が信じるに値するのか。人生を懸けるに値するのか。そこが論点になるべきであります。進化論を科学ではなくて宗教と言いつつのは、実際に進化論というものが科学的な根拠のないただの仮説に過ぎないということも、大抵の方は聞いていると思いますけれども、その辺も少しだけ今日触れたいと思います。それを知ると皆さんも目が開かれると思います。進化論というのが科学であって、創造論というのが宗教である。勿論創造論も科学的なアプローチで現代の現象、物理法則をこの**創世記**を元に理解すれば非常に分かりやすく、いろんな疑問が解けるという事も確かに言えるんです。近代科学の始祖たち、彼らはみな創造論者であって、聖書を真面目に信じる者たちで、聖書を研究した結果、彼らの築いた仮説なり論理なり、実証した実験結果というものが今日の科学の源流となっているわけです。ですから、アイザック・ニュートンをはじめ、みな近代科学の父と呼ばれている人たちは、聖書を真面目に研究して、そしてそこからいろいろな科学的な可能性というものを、仮説というものを引き出して、そして実験の結果それぞれが実証されてきて、今日の科学の基礎を築いてきたということでもあります。

しかし、目に見えない神を科学的に説明することは出来ません。すべてのものを、万物を神が造られたというその一言が**創世記**の冒頭の言葉です。『**初めに、神が天と地を創造した。**』これを科学的に説明して下さい、と言われても、確かにこれは不可能です。同じように進化論を科学的に説明して下さい、と言われても、それは不可能なんです。

進化論を立証出来るような証拠は何一つ発見されていないからです。これはあくまで仮説に過ぎません。

そういうことを踏まえながら今日は序論の中で特に進化論と創造論、これが『科学 対 宗教』という構図ではなくて、対立構造ではなくて、むしろ『宗教 対 宗教』で、どちらか一方それが真理となります。両方とも真理ということはありません。対局していますので、進化論の方が創造主を認めない、否定する宗教、信仰体系で、創造論は創造主を認めていく、信じていく、そのような信仰体系ですから、そのどちらの信仰体系が妥当かどうか。そして勿論私たちの信じている創造論というのは神の言葉と呼ばれる聖書をベースにしたものです。進化論は人間の言葉をベースにしたものです。例えば進化論によれば地球は 45～46 億年という歴史を持っていると。実際に 45～46 億年前にいた人が進化論を提唱しているならば、それは信じるに値します。でも、つい最近の人が「地球は 45～46 億年前に造られた。」とか、或いは「宇宙というのは 150 億年前にビッグバンで発生したんだ。」とか。その時に居なかったのに平気でそういったことを絶対化して、それがあたかも真理であるかのように説くのが進化論です。その人の言葉を信じて進化論を信奉しているのか。それとも創造論者のように神の言葉を信じて創造論というものを、**創世記**を字義通り、文字通り信じるのか。そういう対決であります。ですから私たちの意図は聖書が如何に信じるに値するものか、信憑性の高いものかが鍵となってきます。

ここに書かれていることが全部デタラメだったら、私たちの信じている創造論という教え、或いはキリスト教という宗教は、デタラメな宗教で、それこそカルトと言って良いと思います。そこには一つも真理が含まれていない。ただ、鯛の頭も信心から。「聖書にそう書いてあるから、だから信じています、だけのことであって、信じようと信じまいとそれはその人の自由です。」で片付けられてしまって、信ずるべきものとは言えないわけです。「信教の自由の中で、勝手に信じたって構わない。」と。それが保証されているだけで、絶対に信じなければいけないとか、これを信じなければ救われないとか、イエス・キリストが唯一の救い主で神でイエス・キリスト以外には救いがないとか、そのような断言は出来ないわけです。

一方で進化論をどうでしょうか。断言出来るだけの絶対的な真理というものが含まれているものなんでしょうか。その辺を、ここにいる皆さんはほとんどが聖書を字義通り信じている人ばかりです。ですので敢えてそういうチャレンジを皆さんにする必要はないかと思うんですが、でも皆さんは逆にチャレンジされてくると思います。「NHK で進化論を教えているじゃないか。国営放送で教えているんだから間違いない。税金でまかなわれているそんな保証されたものが他にあるだろうか。専門家が口を揃えて進化論がもう絶対的なもので、前提であって、これによって私たちは真面目に科学をしているんだ。」と彼らはそう言うわけです。

でも本当にそうなんでしょうか。テレビで言っていることが、NHK で言っていることが絶対的なんでしょうか。皆さんが学校で教科書で習ってきたこと、生物や化学の、物理学の先生たちが言っていることが、本当なのかどうか。ここです。絶対的なものであれば、それは変わらないものであるはず。10 年前と変わらないものであるはず。50 年前と変わらないものであるはず。100 年前と同じでなければいけません。でも科学はどうでしょうか。コロナ変わっています。皆さんが子供の時学んだ教科書の内容と、今の子供たちが学んでいる教科書の内容は、全然違います。ですから、皆さん嘘を学んできたことも沢山あるわけです。それでテストを受けて、良い点を取って、受験して合格してきたという経緯があるわけです。でもそのすべてが真実でなかったということも知って頂きたいと思いません。

今一度、**創世記**が聖書の土台であって、そして私たちの信仰の土台であるということを強調したいので、一人の有名なイギリスの神学者、聖書教師の言葉を紹介させて頂きたいと思えます。J・シドロ・バクスターという人です。その人の言葉です。「**聖書の他の書は創世記と不可分に結び合わされているのである。**」聖書と**創世記**。この関係が、66 巻の、もうすべてはそこから派生しているということです。**創世記**を抜きに他の書物の存在は考えられないと言っているわけです。不可分に結び合わされている。**創世記**を除いてしまったら、もう聖書は成り立たないと言っているわけです。「**聖書の主要なテーマは、下流になるに従って深く広く大きな川に例えることが出来る。**(創世記からずっと川が流れ出ているといったイメージを持って下さい。)そしてこれらの全ての川は**創世記**という分水嶺

から流れ出したと言って間違いない。或いはもう一つの象徴として、かしの木の巨大な幹や広く茂る枝がかしの実の中に秘められているように、含蓄と期待という形で聖書全部が創世記の中にあるとも言える。」かしの実の中に、そこから巨木が生まれてくる。本当に小さなその実の中にすべてがぎっしり詰まっているように。そこに生命が全て詰まっている、種ですから。そういうイメージを創世記に持って頂きたいと思います。ここから全てが始まっていくということです。逆に言いますと、創世記さえ押さえれば聖書全部が押さえられるということです。これが土台となれば、あとは容易く理解出来るようになるということです。そして、続きに「ここには後になって広がるすべてのものの萌芽がある。実にのちに現されるすべての啓示の根は、創世記の中に深く植えられている。そしてその啓示を理解しようとする人は、創世記から始めなければならないのである。」聖書を理解したいという気持ちが皆さんにあると思います。「どこから始めたらいいですか。」創世記から始めて下さいと、そのように J・シドロ・バクスターという人が言っています。

そして宗教改革者のジャン・カルヴァンの言葉も紹介します。「創造主なる神に到達するために導き手および教師として聖書が必要である。」クリエイターである創造主に辿りつきたければ、どうしても聖書が必要だと。特に聖書の中の土台である創世記がとりわけ重要になってくるということです。

それらは宗教家たちの言葉なんですけれども、科学者の言葉も 1 つ紹介させて頂きます。アーノ・ペンジアスという人で、アメリカの天文学者でノーベル物理学賞を受賞した人です。「宇宙には生命体の存続に必要な完璧な条件をもたらす非常にデリケートなバランスと基本的な計画(それを超自然的計画と呼ぶ人もいるかもしれない。)が必要とされる。天文学はそのような宇宙が無から創造されたという無類の事件に私たちを導くのである。私が創世記の最初の数章と詩篇を数篇、それに他の聖書の数章以外に何のデータを持たなかったとしても、宇宙の根源について原則的には科学的データが示すのと同じ見方に到達しただろう。」アーノ・ペンジアスという人の言葉です。宇宙背景放射の発見によってノーベル物理学賞を受賞した方です。

「創世記の最初の数章」と言いましたが、創世記の中でも特に土台となっているのが 1～11 章まで前半の内容です。聖書を信じていない人たちは、その内容はただの神話だと言います。それは勿論進化論者とか無神論者を自称する人たちのみならず、キリスト教界の中にも聖書を文字通り信じない自由主義神学の立場の人があります。或いは聖書はすべて神の靈感によっては書かれていない、そういう立場の人を高等批評家とも言います。彼らによれば創世記の 1～11 章までのその内容は、創世記神話だと言うわけです。古事記だとか日本書紀と同じレベルの神話だと言っているわけです。或いはギリシャ神話だとか同じような神話だと言っているわけです。

一方で私たちはその創世記の 1～11 章を書かれている通りに、字義通りに信じる者です。「それは盲信ですよ。この科学の時代にそんなおとぎ話、誰が信じるんですか。」でも実際にはアーノ・ペンジアスというノーベル物理学賞を受賞したその人が、創世記の数章と詩篇の数篇、そして聖書の他の書を、例えばヨブ記とかイザヤ書を見ると創造のことが書いてあります。宇宙の創造のこととか、地球の創造のこと、生命体の創造のことが書いてありますが、それだけとって今の科学データにピッタリ合致するような言葉を見て、この書は、この聖書という神の言葉は信じるに充分値するものだという結論が出せると。世界トップの科学者もそのように公言してはばからないということなので、是非自分が知恵者で進化論が絶対だと自称しているような人たちに、皆さんもチャレンジして頂きたいと思います。実際に彼らは聖書なんかほとんど読んでいません。「聖書なんかおとぎ話だ。そんなのは神話だ。」とそう言う人たちに限って聖書を読んでいない人たちであります。聖書を読んだ結果そう言って結論付けているのではありません。そして同時にもっと面白いことにそんな彼らは進化論もろくに読んでいません。ですから何も読んでいない、知らないのに断定しているわけです。これは完全なる偏見です。

でも一方で、私たちも創造論者として偏見を持っています。すべてのものは神によって造られた。創造主は存在する。これも言ってしまうと偏見です。ですからこれは、『偏見 対 偏見』の対決だということです。絶対に偏見という言葉に惑わされないで下さい。「あなたの言っているのは偏見ですよ。そんな聖書が神の言葉だとか。進化論がおかしくて創造論が正しいとか。イエス・キリストだけが唯一の救い主で神で、他の宗教は全部間違っているとか。全

部偏見ですよ。」と。そしてあなたは認めて下さい。「そうです。偏見です。」と。でも同時に「あなたも偏見を持っています。」と。「クリスチャンはみな独善的で非寛容であると。日本人はみな寛容でどんな宗教でも受け入れるじゃないですか。」そんなふうに言われることもあると思いますが、「あなたがそんなに寛容でしたら、どうか私の立場も受け入れて下さい。」と、言い返してあげて下さい。「そんなに寛容でしたら、神が絶対で唯一でイエス・キリストだけがただ一人の救い主でイエス・キリスト以外には救いがないというこの立場も、あなたが寛容だったら受け入れて下さい。」と。彼らは行き詰まります。何を言っているのか自分で全く分かっていないのです。自分が如何にも知恵者であって寛容であるかのような、立派な人格者であるかのようなことを思い込んでいますが、実際には彼らは自分で何を言っているのか、何を考えているのか、それがどんな立場であるのかは全く理解出来ていない人たちです。彼らも偏見を持っています。彼らも寛容だなんて自称していますが、実際には最も非寛容的な人たちであります。そういうロジックを皆さんにもしっかり持って頂いて、彼らのアプローチに驚いたり惑わされたり揺るがされないようにして頂きたいと思います。そのためにもしっかりと**創世記**を皆さんの土台として頂きたいと思います。

そしてもう一つ宇宙開発の父と呼ばれる方、ヴェルナー・フォン・ブラウンという人の言葉も紹介させていただきます。今のロケットの父と呼ばれるような人なので有名な人です。最新の科学、宇宙科学なんていう分野は全くキリスト教とは無縁であるとか、**創世記**のような教えとは全く無縁のように思うかもしれませんが、実は真逆であります。宇宙開発の父ヴェルナー・フォン・ブラウンの言葉です。「宇宙の広大な謎は、創造主は間違いなく存在するという私たちの信念を、信仰を追認するばかりであろう。宇宙の背後に優れた合理性があることを認めない科学者を理解することも、科学の進歩を否定する神学者の真意を把握することも、私にとっては難しいことだ。私が神を信じている理由ですか。(尋ねられた時には、彼はこう答えました。)簡単に言えば、主な理由はこういうことです。私たちの地球や宇宙のようによく秩序が整い、かつ完全に創造されているものには、必ず造り主、卓越した設計者が居るに違いないということです。この宇宙のように非常に秩序正しく、非常に完全で、非常に正確にバランスの取れた、そして非常に雄大なものは、神の構想の所産以外のものではありません。造り主は居るに違いありません。それ以外に考えようがありません。」ロケットを作った人がそう言っているんですから、間違いありません。「ロケットは偶然できました。」誰も信じません。「ある時いろんな鉄くずが風に吹き飛ばされて、気が付いたらロケットが出来てしまいました。そのロケットが気が付いたら宇宙に飛んでいました。」誰も信じません、そんな馬鹿らしいおとぎ話は。それと同じように、それ以上に進化論は、荒唐無稽なものだということです。すべてがひとりで、勝手に、偶然に。アメーバも馬鹿にしてはいけません。アメーバが出来るのには、これは驚くべき実はデザインがなければ、そういう下等生物と馬鹿にしてしまうものでも人間が作り上げることは出来ないのです。これが偶然に生まれる可能性なんていうのは、もう確率的には考えられないのです。文字通り天文学的な確率となりますから、実際に地球が 46 億年あっても足りないぐらいです。46 億年では足りない。150 億年あっても足りないのです。アメーバ 1 つ出来るのに、偶然の産物としては説明出来ないのです。でも進化論者たちは真面目に信じています。そうに違いないと。何故でしょうか。創造主を認めたくないからです。

そして、その創造主を否定するとどうなるのか。先程も冒頭に言った通り、進化論というのは無神論者の宗教、カルトだと言いました。カルトとまで言い切ったのは、それは荒唐無稽なもので実際にそこに真理が含まれていない。むしろ創造主を意図的に否定している。本来は知っているのに、敢えてその存在を意図的に隠そうとしている。そのようなやらしさがあるわけです。そのような邪心があるわけです。その意味でカルトだと言っているわけです。敢えて盲目を装っていると行って良いと思います。

ローマ 1:20 から読んでいきますので、皆さん目で追って下さい。『<sup>20</sup> 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。<sup>21</sup> それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神とあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。<sup>22</sup> 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、<sup>23</sup> 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。

24 それゆえ、神は、彼らとその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。(これは性的に倒錯に走っていったということです。)<sup>25</sup> それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み(偶像礼拝ということです。)、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。』この後も続きがございませぬ。同性愛がどうして生まれてきたのかということも聖書は教えています。勿論その起源は初めの書である**創世記**に見出すことが出来ます。何かを知りたいければ、その起源の書である、初めの書である、原初の書である**創世記**に見出すことが出来ますので、私たちのまた信仰の原点もそこにあります。そこに立ち帰れば、またやり直すことが出来ます。その土台をしっかりと再構築したら、二度とを揺るがない者に変えられていきますから、大切にしていきたいと思ひます。

詩篇 14:1 にも『愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。』『神はいない。」と言っているのは愚か者です。それが創造主の言葉であります。何故愚かかということも後ほど触れたいと思ひますが、この創造主を否定する進化論なり無神論というのは、実際にありとあらゆる宗教、信仰体系です。或いは思想、哲学、学問、いろんな趣意、いろんな世界観や宇宙観や人生観、価値観、政治観といったもの、いろんな体系システム。そしてそれが日々のライフスタイルにまで多岐に渡って影響を与えているということ知って頂きたいと思ひます。何を信じているか。これは重要であるということ。何を信じたって構わない、ただの宗教、ただのたしなみ、ただの文化・カルチャーと思ひかもしれませぬが、実際に人は自分が信じているものに従って生活を営んでいます。何を信じるかは、あなたの人生を決めていきます、左右します。そして死後の世界、永遠にあなたがどこで過ごすのかも、何を信じているかによって決定付けられてしまうということ。人は信仰なくしては生きていけません。無神論者ですら無神論の神を信じているんです。無宗教者すら自分たちの宗教を、名前がついていないだけでそれなりに彼らは自分たちの信仰・思想というものを持っているわけ。『何も信じていない。』なんて言ったら生きていけないのです。実際に皆さんが椅子に座っているのも信仰があるから。あなたの体重を支えることが出来ると信じているから座っているの。あつて、もし信じなかつたらどうでしょう。立つままです。飛行機はどうでしょう。もしかしたら空中分解するかもしれないとか。とてもこのパイロットは信用出来ないから私はこの飛行機には搭乗出来ないとか。どこにも行けませんし、何も出来ません。タクシーもバスも乗れませんし、またレストランでも毒が入っているのではないかとか、妻が何か盛っているのではないかとか。信じていなければそれこそありとあらゆる不安症・心配性でもう何もかも信じられないことばかりで、生きていけないわけ。ですから何かしら私たちは信じながら、信仰なくしては生きていけないということは認めなくては行けません。ですから何が信じるに値するのか。その信仰が本物か偽物か、良いものか悪いものか。それによってあなたの人生が本物にも偽物にもなります。それによってあなたの人生が良いものにも悪いものにもなります。それは永遠に固く立つのか、永遠に滅んでしまうのか。ふたつにひとつです。とどの詰まる所はそうなつて行くということ。』

そのことを今皆さんの心に留めながら改めて Institute for Creation Research (ICR)の創立者でヘンリー・モリスという人の言葉を紹介したいと思ひます。少し長いですがけれども、じっくりと聞いて下さい。彼は水文学という学問のエキスパートです。勿論科学者であつて、同時にキリスト教の弁証論者でもあります。

「進化論の持つ反有神論的性格は(有神論というのは神を信じている。無神論に対して有神論という言葉があります。)、多くの反キリスト教的社会哲学と進化論体系が生み出した反道徳的社会習慣とに明示されています。(難しく聞こえたかもしれませぬが、次の事例を聞けば皆さん分かつと思ひます。)社会主義、共産主義、無政府主義、その他多くの左翼運動の科学的・理論的な根拠として進化論が使われてきました。(進化論をベースに社会主義、共産主義、無政府主義。無宗教です。神なんか居ないわけ。その一方で、右翼の哲学者は闘争と適者生存というダーウイン進化論の概念を用いてナチズム、人種差別、帝国主義、自由放任的資本主義などの多くの有害な体系を正当化しようとしてきました。前者に属するマルクス、レーニン、スターリンは熱烈な進化論者でしたが、後者に属するヘッケル、ニーチェ、ヒトラーもやはり熱烈な進化論者でした。(この前者後者は、相反する対抗するようなグループだと皆さん思っているかもしれませぬが、両者とも実は共通のベースを持っています。それが進化論とい

う無神論者の宗教と言って良いと思います。信仰体系です。ここが盲点になっていると思います。) 世俗ヒューマンイズムの教義として有名なヒューマニスト・マニフェストが 1933 年に宣言されましたが、その第 1 条と第 2 条では『宇宙と人類が進化したこと』を事実としています。どんな形であれ無神論、汎神論(汎神論というのは全部神様。神道の立場です。やおよろずの神。)、神秘主義は必然的に進化論に基づいてしまいます。決定論、実存主義、行動主義、フロイト主義、その他同様の非道徳的心理学体系も進化論に基礎を置いています。(大抵の学問のベースは進化論ということです。)進化論は実に極めて哲学的かつ宗教的であって、科学的ではないのです。驚くべき事に資本主義社会でも、それ以外の社会でも政教分離を根拠に教育者が創造論を非難し学校などの公共施設内で創造論について話すことを禁止するのに、進化論については国家の唯一無二の宗教として事実上正当化されているのです。実質進化論は、無神論やヒューマンイズムだけでなく、汎神論(あらゆるものを神として崇拝すること。)、神秘主義(これは霊との接触やそれへの帰一融合。)、アミニズム(あらゆる事物に霊魂や精霊を認めてそれらを崇拝する。)など様々な宗教の根幹をなす前提です。広く信じられている民俗宗教(道教、仏教、儒教、ヒンズー教)、他同様の信仰は全て本質的にある形式の進化論に基づいています。それらは時間と空間から成る宇宙を唯一の究極で永遠の実在と捉えます。そしてあらゆるものを超越した宇宙の創造者をいかなる形であれ否定します。本来創造論に立つ信仰(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)でさえ進化論を信じる自由主義的な信仰へと羽ばたいてきました。そしてほとんどの有名神学校やミッション系大学でも進化論の見地から教えるようになってきました。進化論の哲学はほとんどの反キリスト教な社会哲学、経済哲学、宗教哲学の基礎であるだけではありません。今日世界を荒廃させている多くの反社会的で不道徳な行為(妊娠中絶、麻薬、同性愛、動物的不道徳など)に対して進化論という疑似科学が理論的根拠を提供しているのです。(元々動物ですから別に一夫一婦制でなくてもいいわけです。好きな人と寝ていいわけです。好きな時にセックスすればいいわけです。男も女もありません。別に偶然に生まれた産物に過ぎないのだったら、赤ちゃんを殺したって構わないわけです。人間の尊厳なんかないわけです。偶然の産物ですから、意味なんかないわけです。人を殺そうと、人の物を盗もうと取ろうと、他の人の結婚相手を寝取ろうと、全然構わないわけです。動物ですから。何も倫理とか、理性だとか、道徳なんていうものは求められないわけです。やりたい放題やって構わない。そして、それを否定してくれるな、と言うわけです。絶対的なものなんかない。そんな基準なんかないんだと。そういうことです。そしてヘンリー・モーリスは、最後にこう言っています。)この地球の秩序や美しさを見れば、創造主なる神を認めず思想的にも有害な仮説である進化論が正しいとはとても考えられないでしょう。」

ここが皆さんに今日チャレンジしたいポイントであります。実際に創造主を否定するとどのような人間になっていくのかということです。どのような社会になっていくのかということです。世界は今混沌としています。私たちの社会もあらゆる面で非常に不安定です。別に大きな話ばかりではなくて、小さな話も、例えば皆さんの家庭の中はどうでしょうか。職場はどうでしょうか。個々人の心の中はどうでしょうか。不安定です。何が正しいのか何が間違っているのか、人はいろんなことを言います。下手なこと言うと差別だとか、偏見だとか、寛容じゃないとか、排他的だ。絶対的なものが認められない、そういう社会になりつつあります。

そういう創造主を否定するような思想で進んでしまうとどうなっていくのか。それも聖書に書かれています。ノアの時代、ソドムとゴモラのあのロトの時代。そしてそれが世の終わりの時代の実は予型となっている、ひな型となっているということが聖書の中に書かれています。歴史は繰り返すと言いますがけれども、創造主を否定した社会、国家、その時代がどのような顛末を辿っていくのかは**創世記**の中にハッキリ書かれています。イエス・キリストはそこを文字通り信じて、世の終わりはノアの日のものであると。あるいはロトの時代のものであると、おっしゃっているわけです。ちなみにイエス・キリストは創造論者です。ですからクリスチャンと言いながら「否、創世記は神話だ。特に 1 章から 11 章の天地万物が 6 日間で出来たとか、或いは最初の人アダムとエバ、そんな馬鹿らしい話はない。」とか、「すべてノアの子どもが世界のありとあらゆる民族の先祖となったとか、或いはバベルの塔のあの故事から世界中の民族がいろんな言葉を持って世界に離散していったんだとか、そんなおとぎ話・ファンタジーは信じられない。」と言う進化論を信

奉する自称クリスチャンたちが大勢おります。残念なことに日本の多くのプロテスタントは創造論を信じていません。進化論を信奉しています。聖書の言葉よりも進化論の方が正しいと思っているからです。

その一方でイエス・キリストは、天地創造は文字通り 6 日間によって成されたと信じています。その一方でイエス・キリストは、アダムとエバが私たち人類の先祖だということを信じています。イエス・キリストを信じているならば、イエス・キリストが信じているものをも信じなければいけません。それなのに彼らは口先で「イエス・キリストは私の救い主です。イエス・キリストは道であり、真理であり、命です。イエス・キリストを通してでなければ誰ひとり父の御許に、天国に行くことは出来ません。」という言葉は信じながらも、イエスの信じている創造論は信じていません。「イエスは知らなかったんです。最新の科学がイエスの知識になかったので、だから創世記のようなファンタジーをイエスも信じていたんです。」そういう結論になってしまうんです。

話を戻したいと思いますが、今日はヘンリー・モーリス以上に実は皆さんに引用して伝えたい一人の人がいます。その人はケン・ハムという人です。この人は Answers in Genesis, AiG と言いますが、その創造のミニストリーは世界的に認知されていて、よく進化論者と創造論者のディベートというのが、公開討論が成されたりして、世界から注目を浴びるようなそういうところにも出てくる人です。哲学博士でもあるんですけど、彼は元々高校の先生だったんです。その時に**創世記**の記述が文字通り信じるべきものかどうか、いろいろ悩んでいる時にヘンリー・モーリスという人の著作に出会って、このケン・ハムという人は熱烈な創造論者になりました。**創世記**を字義通り信じる信仰者として世界中でいろんなセミナーだとか、また講義を行って飛び回っているような人であります。その人の言葉をちょっと紹介します。彼が特に日本の教会に対して語っておられる言葉がありますので、それを皆さんに聞いて頂きたいと思います。少々長いですが、聞くに値するものだと判断しましたので、聞いて下さい。

「日本の教会が人々をキリストのもとに導き社会悪を除去しようとするなら、イギリスやアメリカの例から厳しい教訓を学びとらなければならない。これらの国では教会がかつて持っているすべての人に浸透していた影響力のほとんどを失っている。その理由は教会が創造と進化の問題の真の特質を理解していなかったことにあると私は考えている。事実多くの教会の指導者たちは進化主義の考えを受け入れており、この考えが、彼らが信じていると主張している福音の土台を穿つ結果となっている。教会は、聖書と進化は相入れないという事実に目覚めなければならない。進化の考え方は、科学どころではなく実際は創造主を否定する宗教である。進化主義を受け入れ、その結果創世記 1 章から 11 章の解釈を変えることによって、教会の指導者たちは創造主ではなく罪深い人間に権威を委ねる結果となる。彼らは聖書信仰の土台をも侵食している。なぜなら直接間接を問わず聖書教理のすべては究極的に創世記 1 章から 11 章に基づいているからである。仮に創世記がありのままの歴史でないとするなら、クリスチャンは神話に基礎を置いていることになる。どうして他の人にそれを受け入れるように勧めることが出来ようか。アメリカの教会が進化論を受け入れ、人間の学説を用いて聖書を説明するようになるにつれ、時間とともに教会が不信仰へと滑り落ちて行くのを私は見てきた。もし創世記が歴史的に正しくないとするなら、聖書の正しさはどこにあると言うのか。最初のアダムが神話に過ぎないなら、最後のアダムであるイエス・キリストも神話ということになる。もし文字通りにアダムの墮落の歴史がなかったなら、罪とは一体何であろう。もし木の実、蛇、アダムが文字通り存在したエデンの園での反逆が文字通り本当でなかったら、どうして罪が創造主に対する反逆になろう。アメリカやイギリスやその他の崩壊しつつある社会の抱え込んでいる問題に対するただ 1 つの解決は、教会が目覚め、聖書の権威に立ち返り、進化主義という宗教を拒絶することである。日本の社会問題を解決するには、教会が聖書の絶対的権威に立ち、進化という考え方の恐るべき実態を人々に知ってもらう必要がある。進化という考え方が創造主を否定する宗教であって、真の科学的根拠はなく、何の証拠もない。しかしクリスチャンは実際の行動に移る前に彼らの考え方の土台をよく理解した上で受け入れなければならない。彼らが信じている対象、また信じている理由を知っておく必要がある。彼らには創世記が非常に重要であることを教えなければならないし、進化主義に立つヒューマニズムの創世記に対する批判にどのように反論したらよいかを示さなければならない。私たちが世界に向けて語るために与えられているメッセージとは何か。それは創造主がおられ、私たちが創造されたゆえに私たちに対して所有権を持

っておられるということである。人生には目的と意味があり、私たちを取り巻いている死と闘争に対しては解決がある。私たちは善悪を知り得る。なぜなら完全に信頼出来る絶対的権威をもったお方がおられるからである。これは進化の考え方とは何と異なっていることだろう。人間も単なる動物に過ぎず、その存在に意味はないというのが進化主義の教義である。だから自殺のようなひどい行為がはびこるのである。(日本は世界有数の自殺大国とも言われています。) 悲しいことに学校や報道機関を通しての進化主義教育は社会と教会を破壊している。創造なのか進化なのかの問題は、どうでも良い問題どころか、すべての問題の根源である。」ここに皆さんにしっかりと目を留めて頂きたいと思います。創造なのか進化なのかはどうでもいい問題ではなくて、すべての問題の根源であるということです。社会問題の根源はどこにあるのか。人間関係の問題の根源はどこにあるのか。ありとあらゆる問題の根源がここにあるということを知って頂きたいと思います。ですから「別に私は創造だとか進化だとか、或いは科学なんていうものには何の興味もありません。」と。でも毎日の生活にこれが深く関わっているとしたらどうでしょうか。無視出来ない問題であるということを知ったら、皆さんも興味を持つと思いますし、むしろもっと突き詰めて、自分たちは本当に何を信じているのか。私たちが信じていることの土台とは一体どのようなものなのかということを確認しておく必要があります。曖昧ではなくて、何となくではなくて、正確に正しく知っておく必要があります。

同時に大勢を占めている進化論、無神論の立場。そういった彼らの数にもものを言わせた圧力に屈しないで頂きたいと思います。生物学者でノーベル賞をやはり受賞しているクリスチャン・ド・デューブという人がこう言っています。「無神論者は科学により確立される。或いは強められるという意見はナンセンスだ。」と。無神論の人が如何にも科学的で知恵者であって何でもスマートに分かっているような人のように皆さんイメージすると思いますが、そうではないということです。

そして進化論の原点と言えば、彼らのバイブルと言って良いと思いますが、それはチャールズ・ダーウィンの書いた『種の起源』というものです。進化論を信じているという人の中に『種の起源』をどれだけの人が読んでいるでしょうか。大半の人は読んでいません。聞けば分かると思います。その『種の起源』の中に(岩波文庫で日本語で出版されていますから皆さんも読むことが出来ます。)第9章の「地質学的不完全性について」という項目があります。ダーウィンは自分の説を絶対視はしていなかったのです。地質学的不完全性という見出しをつけて、こう言っています。「かつて地上に存在した中間的変種の数も実際巨大であったはずである。」中間的変種というのは、例えば猿から人間に移行する間のその中間種、それが類人猿と呼ばれるものです。皆さんも教科書で習ってきたと思います。私も子供の頃、最古の類人猿はアウストラロピテクスとか、ネアンデルタール人とか、クロマニヨン人、北京原人とか、いろいろ習いましたが、全部創作です。すっかり騙されました。実際にそれらが如何にも存在したかのように教え込まれました。叩きこまれましたけれども、でもそんなものは実際に存在していないという事。まだ未だ立証されていないのです。「化石があるじゃないですか。」ないんです。まだ実際のところはその化石が類人猿かどうか分からないんです。猿かもしれないんです。そう思いたいんです。中間種がないと進化論は成り立たないので、それを中間種に仕立て上げたいというのが本音であります。実際にネアンデルタール人は現代人と全然変わらなかつたりするわけです。骨格を見たら今でもちょっと類人猿ぽいような骨格を持っている人もいますから、私もいろんな人の骨格を見てきましたけれども、様々です。これが類人猿だと言ってしまえば、もうそんな格好をした骨格はいくらでもあるわけです。「背骨が曲がっている。それは中間種に違いない。」と。単純に背骨が曲がった人が死んだだけです。そういうのがいっぱいあるわけです。

話を戻したいと思いますが、ダーウィンは「かつて地上に存在した中間的変種の数も実際巨大であったはずである。」進化論が正しければそうです。「それならばなぜすべての地質学的岩層や地層がこのような中間的環でいっぱいになっていないのであろうか。そしてこのことは恐らく私の学説に対して提起される異論の中で最も明白かつ、重大なものであろう。」そこを突かれたら進化論は崩壊すると、ダーウィンは認めているわけです。中間種が見つからなかったら、私の説はただの仮説に過ぎないと。

さらにダーウィンはこう言っています。これは『人類の起源』という書物です。ダーウィンの書いた中央公論社から

出ているものです。「人間と猿に似た人間の先祖を繋ぐのに役立つような化石の遺物が欠けていることについて、ライエル卿が(ライエル卿というのも進化論の父です。)すべての脊椎動物の網の化石遺物の発見は遅々としたものであり、また偶然に支配されると論じているのを読めば、だれもこの欠損の事実にあまり重きを置かないであろう。また猿に似た絶滅動物と人間を繋ぐ遺物を多数提供しそうな地域が、地質学者によってまだ調査されていないということも忘れてはならない。」ということかと言いますと、実際にその中間種というものが見つければ、進化論は成立して証明されるのですけれども、それは未だ見つかっていない。その調査が随分と遅れているようであって、単純にいつかそれが発見されればいけれどもという希望的観測を言っているんです。でもダーウィンが進化論を唱えて『種の起源』を出版してから、もう120年以上経ちます。未だに120年経っても世界中で一生懸命無数の進化論者たちが発掘しようとしているんですが、見つからないで、捏造ばかりしているわけです。私たちが教科書で学んできたような進化論の系統樹に出てくるような中間種の存在、化石で見つかりましたとか。類人猿のものも含めてほとんどが捏造であります。想像上の産物に過ぎないということです。これが進化論です。ひとつも事実がないファンタジーです。そうあって欲しい、そういう人間の空想科学と言って良いと思います。

さらに化石学者でシカゴ博物館のフィールド・ミュージアムの地質学館長を務めているデービット・ラブという人が、勿論一流の科学者で進化論者でもあるんですが、彼はこう言っています。「地層の中に私たちが見出す証拠は、私たちが期待しているようにダーウィンの自然淘汰説と調和しているわけではない。ダーウィン後120年が過ぎ化石に関する知識は大いに増した。私たちは今や化石となった生物を25万種も手に入れている。(このシカゴ博物館には世界の多くの化石が収容されていて、世界的に有名なところなので、その人が言うなら間違いありません。)けれども進化の跡を示す記録は依然として驚くほど気まぐれで、皮肉なことに進化の過渡的段階を示す証拠は(その中間の存在です。)ダーウィンの時代に私たちが有していたものよりもっと少ない。」これが現実であります。化石のエキスパートが、権威がそう言っているんです。世界中から届けられる化石、今もどんどん集められているはずなんですけれども、まだ見つからないわけです。そして、これからも見つからないと思います。見つからないということは、逆に言うと聖書の創世記の記述通りということです。進化なんていうものは、そのプロセスにはなかったということです。神はそれぞれを種に従って造ったんです。人間は人間として造ったんです。猿は猿として造ったんです。下等動物からどんどん進化してきたわけではないのです。

エントロピーの法則という熱力学の絶対的な法則が、この物理世界には存在します。エントロピーの法則というのは、難しい名前に聞こえてしまってもピンとこないかもしれませんが、簡単に言いますと「形あるものは全て崩れる。」という法則です。ですからすべてそのような法則に私たちは縛られて生きているわけです。そのエントロピーの法則という本を書いているジェレミー・リフキンという人(これも日本語で読めるんですが)彼はこう言っています。「ダーウィンが『種の起源』を書いてから120年経った今、化石記録に関する研究は大いに進んだ。しかし、進化論を支持する事例は何一つ出て来ないのである。現在、化石記録から分かる事は、1世紀にわたって科学者たちがダーウィン説に都合の良いように様々な化石をうまく並べて行ったということだけだ。しかし、こうしたトリックはすべて無駄だった。今日何百万という化石を見る時、かつて進化の旗を掲げて行進した理論の貧しさ、くだらなさがありありと証明されるのだから。」これは全部クリスチャンではないです。クリスチャンではない人たちの科学の専門家たちの言葉です。

また、シカゴ大学の動物学者でD.M.S.ワトソンという人の言葉も言います。「進化論が世界的に受け入れられているのは、論理的で首尾一貫した証拠によって真実だと証明されたからではない。それは唯一の対案である特殊創造論など、明らかに信じられないからである。」特殊創造論というのが、創造論の立場です。特殊というのは、創造主が存在して、創造主がすべて無から有を創造したという、それを特殊創造論と言います。創世記1章1節の言葉は、特殊創造と言います。「そんなの信じられない。」でも、その特殊創造論を否定する唯一の対案が進化論です。創造主を否定するという、その対案が欲しかっただけです。それが、このシカゴ大学の動物学者のD.M.S.ワトソンの主張するところなんです。何の根拠もないんだと。単に特殊創造論、これを否定したいから進化論というものが人

間によって空想されて、それをいろいろと騙し騙し世界に浸透させてきた。多くの人たちの目をたぶらかし、マインド・コントロールを仕掛けてきたということです。

次に紹介するのは分子生物学者でマイケル・デントンという人の言葉です。彼の書いた本はベストセラーとなって『反進化論』という本です。ダーウィンの進化論が行き詰まったということ、このマイケル・デントンという人も進化論者です。要するにノンクリスチャンということです。でも、その分子生物学者が『反進化論』という本を書いて、進化論を否定しているんです。これも日本語で読めます。「進化論は 100 年前にほとんど証明されており、それに続く生物学の研究は古生物学であれ、動物学であれ、もっと最近の遺伝学や分子生物学であれ、すべてダーウィンの見解を証拠付けてきた、という広く行き渡った神話（これは神話だと言い切っているんです。）、これほど真理からかけ離れたことはない。実際ダーウィン自身も自分の見解の妥当性に対する疑いを募らせていたほど、100 年前の証拠はつきはぎだらけのものであった。」ダーウィンは元々神学校で学んだような人でもありますし、クリスチャンホームで育っていますから、創造論というのは勿論創世記のことを知っていますから。彼は神の存在と言うのは頭から否定していたわけではないのです。たとえば人間の目ひとつをとっても、これは進化論では説明出来ないと、率直に認めていたんです。これが段階的に目というものが出来上がったなんていうこと、肉体も全部そうです。私たちが生命を維持するためには、全部揃っていないければ、最初から全部なければ人間というものは成立しないわけです。段階的に目ができて、鼻ができて、口が出来てなんていうことでは、とても生命を維持出来ないわけです。そんなのは子供が考えたって分かることですが、ダーウィンもそこにおいては認めていたわけです。話を戻しますと、「彼の理論で唯一（ダーウィンの理論で唯一）この 100 年間にわたって支持されてきた考えは、小進化の現象に関わるものだけであった。偶然の突然変異が徐々に継続して積み重ねられることによって進化が起こり、地球上のすべての生命が生じてきたというダーウィンの理論一般は、彼の時代と同様、今もまったく事実の支えを持たない空想性の高い仮説であり、積極的な支持者たちが私たちに信じさせようとするような自明の公理にはほど遠いものなのである。」とノンクリスチャンの分子科学者マイケル・デントンという人が言っています。

もう一つこれも是非興味のある人にはお勧めしたいノンクリスチャンの科学者の本で日本語になっています。『ダーウィンのブラックボックス』という本です。“進化論へ生化学からの挑戦”という副題がついています。『ダーウィンのブラックボックス』という本を書いたのは、リーハイ大学のマイケル・ビーヒーという教授です。『反進化論』は分厚くて専門用語がいっぱいあるので難しく思ってしまうと思うんですが、『ダーウィンのブラックボックス』の方がちょっと読みやすいと思います。そこにこう書いてあります。「ダーウィンは生命細胞の中がどうなっているか知る術がなかった。（その生命細胞の中というのがブラックボックスです。そのブラックボックスの中身を知っていたら、ダーウィンは進化論なんか絶対唱えなかつただろうと言っているわけです。）従ってダーウィンにとっては、細胞はブラックボックスであった。しかし、現代の生化学者は技術革新により細胞の内部構造を理解出来るようになった。つまりダーウィンが知り得なかった情報を得たのである。最先端の生化学の知識で進化論を再検討するとどうなるか。最も単純な生命細胞を想定してみると、その最も単純なものでさえ長時間かけて偶然の積み重ねで出来上がったとは到底考えられない。そこには知的デザイナーの存在を認めざるを得ない。」知的デザイナーという言葉が出てきましたが、インテリジェント・デザインということです。これは ID 理論とも言われるもので、今は進化論がもう行き詰まっています。しかし、創造論は認めたくない。聖書は、どうしても信じたくないんです。なぜ聖書を信じないか。創造主を認めないかという、少し触れた通り、これを認めた途端に創造主に帰属しなければいけない。聖書という絶対的な基準に従って従属して生きなければいけないのです。縛られたくないのです。ですから進化論のままでは科学としては成立しないので、何か知的デザイナーが居て、訳の分からない何か宇宙人みたいな存在が居て、それを something grate と言ったりするんですけども、それは神とは絶対言わないんです。でも、そういうものが居ないと成り立たないということは、もう科学者の間では認められているところです。これはまがいものの言うことだと思わないで下さい。立派な科学者たちが、今は進化論というのは全く荒唐無稽なものだと、何の根拠もないものだ、ということは正直に認めているんです。認めた上で、創造論はやはり否定したいので、創造主と言うよりも何か訳の分からない知的デ

デザイナーが居て、そのデザイナーによってすべてが造られたと。あんな遺伝情報を偶然ですべて組み込むなんていうことはとても出来ない。コンピューター1つ作るのに、スマートフォン1つ作るのにしたって、デザイナーが要るわけです。エンジニアが要るわけです。そんなものが偶然で出来るなんていうことは誰も信じません。それ以上に生命体というのは複雑で、人間をもってしても作り上げることは出来ませんから、どうしても知的デザイナーという存在が必要なんです。それが、科学が出す結論でもあるわけです。でもその結論をそのまま**創世記**に結びつけることは嫌うわけです。対案としてID理論というのを持ってくるわけです。

先ほど挙げたマイケル・デントンとか、またマイケル・ビーヒーという人も、そのID理論というものを主張するようになっていくんですけども。他にもいっぱい紹介したい人がいますけれども、生物学の分野だけではなくて統計学の分野でもギャラップ調査のジョージ・ギャラップという人がこう言っています。世界でギャラップ調査と言えはもうお馴染みの人です。「私は統計学的に神を証明することが出来る。人体だけをとつても一個人の全機能が偶然出来上がるという確率は統計学的に不可能だ。」統計学をもってしても進化論は理論的には成り立たないと。すべて偶然によって生じるということは、統計学でも当てはまらないということです。

またプリンストン大学の教授でエドウィン・コンクリンという人、彼は生物学者、動物学者でもあります。「生命が偶然に生じるという可能性は印刷所で爆発の結果、国語辞典が生じるという可能性に比べられる。」

またモントリオール大学の精神分析医でカール・スターンという人は、(進化論が偶然に生命を発生させて、膨大な時間の中で精神を持った人間が発生して文化を生み出したという考え。)その精神分析医の立場でこう言いました。「精神医学の立場から見ると、こういった考え方は精神分裂患者の抱く妄想に似ている。」進化論者の言うことは、精神分裂病の人の妄想に似ていると言っているわけです。そこまで言い切っています。ですから精神医学の立場からしても、進化論というのはただの妄想であると。

これはクリスチャンの言葉です。living water というキリスト教の弁証論のミニストリーを展開しているレイ・コンフォートという人。もともとカルバリーチャペルの牧師でもあった人ですが、この人の言葉を紹介します。「ダーウィンの進化論は非科学的で観測不可能で信じられないものであるが、世が神を憎んでいるということにおいては理解可能だ。」これが本音です。世が神を憎んでいるから進化論というものが未だに信奉されているんです。理論的に考えて、科学的に考えて、学問的に考えて、常識で考えて、進化論なんていうものは本来信奉し続けるべきものではないわけです。そんなものは教科書にいつまでも載せておくべきものではないわけです。高等教育の中で教えられるべきものではないんです。でもそれを続けているのはなぜか。それは神を、創造主を世が憎んでいるからです。それが本音だと思います。信じられないのではなくて、信じたくない。聖書の主張通りです。イエス・キリストが信じない者に対して、信じない者は光よりも闇を愛したと。彼らは光であるイエス・キリストよりも闇を愛したわけです。だからイエスを信じない。皆さんの周りにもイエス・キリストを信じない人があるわけです。いくらイエス・キリストが信じるに値するだけのお方だということを論理的に実証しても、彼らは最終的には「信じない。」と言います。でも本音は信じたくないということです。イエス以外に救い主はこの世に存在しないということはいくらでも立証出来ます。比較宗教をしてもそうです。またイエス・キリストの歴史的な実在性を言うことも出来ますし、また聖書という文献学・書誌学の立場からも、この言葉が歴史学においても、また考古学においても、また世界に与えているありとあらゆる貢献度・影響力。それをすべて加味しても、イエス・キリスト以外にはまことの救い主は存在しないということはいくらでも証明出来ます。すべて論破出来ます。でも、そうしたところで信じないと言う人たちが多数います。彼らは単に信じたくないだけです。それが本音です。

またレイ・コンフォートはこう言っています。「神が居ると認める倫理や善悪に縛られるから、それを避けるために進化論を信じようとしているだけだ。」このレイ・コンフォートという人は、実際に進化論を信奉する有名な大学の教授たちにインタビューをしてみわっているんです。彼らに率直に質問したりしてい

るわけですが、でも実際に彼らが「進化論を実証して下さい。」と言われると、専門家であるにもかかわらず、大学でそれを教えているにもかかわらず答えられないという、そういうインタビューが実際にビデオになって日本語の字幕もついて youtube とかで見る事が出来ます。DVD でも出ていますけれども、もし興味のある方がいたら紹介します。実際にインタビューしていますから、彼らの顔つきが凍りついたり、変わったり、進化論者に進化論についての質問をして、その大学教授が答えられないという、或いはそこで学んでいる学生たちにもインタビューをして、彼らが答えられないという、そういうインタビュー形式の優れたビデオがあって、進化論を論破するそれに対する反証を示す凄く良く出来たものがあるんですけれども。そういったミニストリーをしているレイ・コンフォートが数々の進化論者を見て出した結論が今の言葉です。

興味深いことにイギリスの動物学者でレオナーズ・マッシューズという人が 1971 年版のダーウィンの『種の起源』の序文を書いているんです。彼がこう言っています。「進化論が偽科学だという批判の声がますます大きくなっている。進化論は生物学の大前提となった結果、何の証明もない理論に基づく科学という、まことに奇妙な立場に置かれてしまった。しかし、これは科学だろうか、信仰だろうか。」今の序文には勿論ありません。こんなことを書いたら誰も読まなくなりますから。これは科学だろうか、信仰だろうか。1971 年、その頃の序文にあったわけです。進化論も創造論も宗教だと言いました。信仰体系のシステムに過ぎないということを冒頭に言いました。何故かというと、宇宙と生命の起源は検査したり観察したりすることが出来ないからです。科学というのは実際にその場に居て、目で見て観察して、実際に検査して、調査して、実験して初めて科学として成り立つんです。でも 46 億年前に誰も行けないんです。誰もそこで実際に調査出来ない、検証もう出来ないんです。なのに、「進化論が絶対である。大前提であってすべてはそこから始まった。」と言うのは、これは暴論でしかないということです。科学を頭から否定している、科学者が進化論を採択するということは、彼らの科学の基礎に置くということは、それは自ら科学を否定する行為であるということです。

同じように**創世記 1 章 1 節**。誰もその場に居なかったんです。アダムも居なかったんです。創世記のちに**モーセ五書**としてモーセが編纂していくんですけれども、そういう意味では、どちらも宗教です。どちらも信仰に基づくシステムです。ですから、科学というものはちゃんと検査出来なければいけないもの、調査出来なければいけないもの、実証データというのをそこで出さないと科学とは言えないということを見ず知って下さい。となれば、創造論、或いは進化論。どちらが信仰体系として妥当かどうかということに今度は話移っていくわけです。どちらも信仰体系が、システムが妥当かどうか。信じて良いものかどうか。信じるに値するものかどうか。それが問題となっていくわけです。

冒頭にヘンリー・モーリスの言葉を言いましたが、進化論が生み出したものがどういうものかは皆さんも知っての通りです。右翼左翼、それぞれが進化論をベースにして何をしてきたのか。それが今世界をどういうふうに変えてしまったのか。皆さんは知っているはずですが、身近なところで言えば、あなたの子供に対して「なぜ人を殴ってはいけないのか。なぜ人のものを盗ってはいけないのか。なぜ誰とでも寝てはいけないのか、セックスしてはいけないのか。減るもんじゃないし。」あなたの子供が、援助交際するなんていうことを言い出したらどうしますか。「そんなことしてはいけないよ。」と。勿論お金を取るとことは法律違反になりますけれども。「じゃあ、お金を取らずに無料で出会い系サイトで出会ったおじさんとセックスをして何が悪いのか。」と、小学生の女の子が、あなたの娘がそういうふうにあなたに聞いてきたら、あなたは何と答えますか。「淫行条例がありますよ。」長野はどうでしょうか。犯罪になるかどうか。倫理はどこをベースにして、どういう道徳観で皆さんは伝えていくのでしょうか。子供じゃなかったら、16 歳以上になったらどうでしょうか。18 歳以上になったらどうでしょうか。20 歳過ぎたらどうでしょうか。「好きなようにやればいい。」それで済ませるのでしょうか。法律に触れていないのだから、何が問題なのか。答えることが出来るのでしょうか。進化論をベースにしている限りは答えることは出来ません。

進化論が間違っているということが、皆さんは今いろんな専門家の言葉からも聞いて「そうなんだ。」というぐらいは思ったと思うんですけども、また本にも、日本語で読める本も出ているということも言いました。インターネットにも実は進化論が間違っているということはいくらでも出ているんですけども、一般の livedoor というところが出しているニュースに『進化論は間違っていた』という見出しがあったので、そこをまた皆さんに読んで聞かせますので聞いて下さい。

「ダーウィンの進化論。生命は同じ起源を持ち、自然淘汰と突然変異を繰り返す様々に進化してきたという今では常識とされている有名な説が、最近の学会では時代遅れとされているという。(これは livedoor のニュースです。)それどころか一部科学の間では間違いを指摘する声も上がり、ダーウィンの進化論自体に突然変異が起こりそうな心配がしているのである。実はダーウィンの進化論を生命の進化の常識と信じきっているのは日本人くらいなのです。ダーウィンの進化論は、聖書が語るすべてを否定することで、すなわち神の存在を否定するもの。キリスト教圏やイスラム圏ではあまりメジャーな学説ではありませんでした。バチカンが進化論の一部を許容した現在でさえ、アメリカの数州やカナダの公立学校では創造論として、進化論とは違う種の起源を教えているほど。今回、絶対匿名の条件にコメントを引き受けてくれた国立大学の准教授である A 氏は淡々と話を始める。「基本的にダーウィンの進化論は間違っていない。ただアインシュタインの相対性理論の登場と遺伝子科学の進化により進化論を取り巻く環境が激変したため、従来の進化論では説明のつかない不具合が生じ始めたのです。ダーウィンの進化論では自然環境の変化に適応した種が残り、進化していくというのが主なロジックであるのだが、この説だと爬虫類から哺乳類への進化、そして猿人からホモサピエンス(人間)の進化に対する証明に無理が生じる。また原人から現在の人間の知能の進化についても解明しなければいけない謎が沢山あります。簡単に話すと、原人と現代人の知能を比べて、これだけ差があれば脳はもっと巨大化しているはず。そうすると産道を通ることは(頭がもう巨大になっていますので)不可能なので、出産の形態まで進化するはず。人間の姿・恰好はもっと変わったものになっているでしょう。仮に原人の脳に現在の人間の知能まで発展する余地があったとしたら、それは進化論を否定することになる。進化の過程に筋書きがあることになりすから。確かにダーウィンの進化論にはまだまだ改良の余地がありそうだとすることは分かってきた。それでは、最先端の進化論では現在どのような説がメインとなっているだろうか。聖書に書かれた創造論、アダムとイブの話は宗教的には真実でも、科学的に信じるには無理があるというのが普通の考えでした。しかし遺伝子の解析が進み、これまでの科学では解明できなかった事実がいろいろ判明してくるとあなたがアダムとイブの話も無視出来なくなって来たのです。(A 氏自身は全くの無神論者だ。科学者であり無神論者である A 氏の口から聖書を形容する言葉が出るとは。)遺伝子を解析していくと、何の役にも立っていないゲノムがいくつかあります。ジャンク・ゲノムと呼ばれているのですが、このゲノムが何らかの作用を起こした時に所謂突然変異が起こると考えてもおかしくはありません。仮に全宇宙の我々より進んだ文明がジャンク・ゲノムの作用を解明して人為的に操作したとしたら、生命は1万年程の短い期間で驚くべき進化を遂げることが可能です。ジャンク・ゲノムがスイッチの役割を果たしているという SF 小説のような話が、現在最先端科学の現場で真剣に話合われているのです。」A 氏の話をもとに調査を進めると、確かに国家レベルでの研究機関での遺伝子解析の結果、突然変異では説明のつかない急激な進化の痕跡がこれまでにいくつも判明しているという。この急激な変化が地球外生命による操作であると判断するにはもう少し科学の進歩を待つほかにはないのだが、常識だと思われていた進化論を疑う時はもうやってきているようだ。」と。

進化論をどうしても捨て難い人たちは、宇宙人が人間のそのゲノムを使って作為的に人為的に操作して、そして短期間に進化させたと。これは真面目に言っているんです。真面目に宇宙人が。その一流の科学者たちが、宇宙人がやってきて(創造主は嫌ですから)、そういうことをしているんだと。インターネットで livedoor なんていうものは、そんなたいしたものではないと思うかもしれませんが、ノーベル物理学賞を受賞した益川博士と IPS 細胞を生み出したやはりノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥博士による対談が本に収録されています。『大発見の思考法。IPS 細胞vs素粒子』という本が出ています。ノーベル物理学者とノーベル医学生理学賞を受賞したそれぞれ日本人

の学者たちの対談の本です。その中にこういった件<sup>くだり</sup>があります。

益川さんが「そういう話を聞くと日本人は進化論を信じないなんて怖いな、なんて思うかもかもしれません。(そういう話というのは創造論の話です。)実は進化論を信じるのもある意味では怖いことなんですよ。」と。

山中さんは「ハイ、なぜなら進化論はまだ誰にも証明されていないからです。なぜか日本人は、人間が皆猿から進化したと信じていますが、証明はされていない。」IPS 細胞は今最も注目されています。

益川さんは「ちなみに最近では進化論と言うと怒られてしまう。今や列記とした学問なのだから進化論ではなくて、進化学と呼ぶべきだと。(皮肉っぽく言っています。進化論は学問ではないんです。あくまでこれは推論であるということです。)それはさておき人は猿から進化したのか、それとも神が造ったのかと聞かれば、日本人はなんとなく猿から進化したという方を信じますが、それは何の根拠もないわけです。」189 ページに書いてあります。

ですから皆さんは騙されてはいけません。教科書がそう言っているから、NHK がそう言っているから、学校の先生がそう言っているから。全部嘘です。ハッキリ嘘だと言えんです。嘘を教え込まれてきているんです。何の根拠もないものが絶対的なものだと、そのように信じ込ませるように刷り込まれてきているんです。これはマインド・コントロール以外の何物でもないと、洗脳教育と言っても良いぐらいです。これを信じないと、これを実際に答案用紙に書かなければあなたは落第するんです。恐ろしいですね。信じないといけなわけです。そうでないと、あなたは学位を取れないわけです。進級出来ないんです。卒業出来ないんです。脅しているわけです。創造論の立場で否定したら、あなたは学校ではやっていけないんです。閉め出されてしまいます。退学処分です。場合によっては放校処分になるかもしれません。

ですから外国人の科学者ばかりが、欧米の人たちばかりが、なんか聖書にかぶれてそのようなことを言っていると思ったら大間違いだということを今証していますので、是非皆さんにも実態を知って頂きたいと思えます。世界的に有名な進化論学者でもあった京都大学の名誉教授の今西錦司さんという人も「研究すればするほど進化論の矛盾に気付いた。」と言うんです。棲み分け理論という進化論の独特な説を彼が提唱したんですけども、日本人で進化論学者といえ知らない人はいないぐらいですけども、彼は自ら科学者廃業宣言というのをしています。「進化が偶然なら生物は生きる意味がない。環境に順応し種全体が共に進化する共進化の機能が生物の多様性を支えているのである。(難しく聞こえたかもしれませんが、先程も少しだけ触れましたけれども、眼だけが進化したのではないです。全部揃っていないければ人間は成立しないわけです。一つ一つがバラバラに偶然に積み重なって人間が出来上がったということはありません。最初から存在しないと。)進化は歴史であり、科学の通念は通じない。」と言い切って自然科学者廃業宣言をしています。それを自著にも挙げましたし、1983 年の毎日新聞にも、潔く自然科学と決別して科学者を廃業すると、新聞の中でも宣言しています。「これからは直感や無意識の世界も取り込んだ自然学を手掛ける。」と。勿論ノンクリスチャンです。

また遺伝子工学の世界的権威の村上和雄という人がおります。筑波大学の名誉教授です。真っ向から進化論を否定する人です。ただ残念ながら天理教の信者です。彼は「生命の存在はダーウィンの進化論では十分に説明出来ないと考え、something great 何か偉大なものと呼ぶ存在を想定し、自身の立場が知的設計論者 (intelligent design) ID 理論の意見に近い。」と述べています。自著において something great を指して、あれは親神様のことで、と証して、something great が天理教の親神様のことを指していると認めています。それは間違っていると思えますけれども。天理教なんていう胡散臭い新興宗教を一流の科学者が信じているのも不思議ですけども、でも村上さんが正しいのは、彼は遺伝子工学の世界的権威として進化論は成り立たないという事は、国立大学の名誉教授が公言してはばからないわけです。一つの遺伝子に組み込まれている膨大な量の情報を研究しているうちに、進化論は絶対にあり得ないという結論に達しています。

また産経新聞では 2011 年 5 月 2 日のものですが特集記事を組んで、創造科学を肯定する側の意見を掲載しました。この特集には英文学者で大阪の摂南大学の国際言語文化学部教授であり京都大学名誉教授の渡辺久義さんという教授にインタビューをしている記事です。「この理論は多くの科学者が支持しており、ID を推進しているの

はキリスト教右派、中共勢力だと言う主張は、ID を快く思わない人間の妄言である。ID を教えず、仮説に過ぎない進化論を公認の学説として扱うのは思考訓練の機会を奪ってしまう。人の祖先は猿だと教えれば、子供たちに人間としての尊厳が育てられない。」というような趣旨の内容です。そして締めくくりは「進化論はマルクス主義と同じく唯物論的であるため人間の尊厳を無視しており、歴史道徳の教育にとって良くない。日本では進化論的偏向教育によって日本神話等が弾圧されたとして、日本も学校で ID を教えるべきだと主張した。」と。渡辺久義という京都大学名誉教授ですけれども、彼は創造デザイン学会代表も務めています。この創造デザイン学会というのは、統一教会の団体なので、今は統一教会とは言わずに今年の 8 月からは世界平和統一家庭連合というふうに変えたので、皆さんも気を付けて下さい。ただ、この渡辺久義さんという人もまた一流の学者としていろんな本も出しています。ただ統一教会が背後にあるので、あまり深入りしない方が良くないと思います。

今までノンクリスチャンとか、或いは信仰宗教の信者とか、或いは統一教会の信者の一流の科学者たちの言葉を紹介しましたがけれども、次に紹介するのは一流の日本の科学者で同時にクリスチャンでもある、プロテスタントのクリスチャンで勿論聖書を字義通り信じている人たちの言葉です。東京工業大学の名誉教授で物理学者の阿部正紀さんという人です。この阿部氏はこう言っています。「進化論は、偶然があたかも知的存在者がデザインしたかのように見える生命と生体の驚くべき秩序と機能をつくりだしてきた。(とおっしゃって)創造論というのは、生物は創造主のデザインによって創造時に与えられた遺伝子を発現させることによって環境に適応してきた。」という考えです。進化論と創造論、どちらが最も満足のいく説明だろうかというチャレンジをしています。創造論も進化論もどちらも 1 つのパラダイムという点では対等な立場だとおっしゃっています。パラダイムというのは一つの立場です。「パラダイムとは、ある時代に科学者集団によって受け入れられている世界観を変えるような重要な理論のこと。その根底にある世界観は証明出来ないが、議論の前提とする公理のようなもので、多数の科学者が受け入れることで正しいとされる。進化論は、自然界に超自然的な働きは一切存在しないという世界観に立つパラダイム。一方の創造論は、自然界は神の超自然的な働きで存在させられたという異なった世界観に立つパラダイムである。この 2 つのパラダイムの優劣を客観的公平に判断することはできず、各自がどちらかを選ぶことになる。」と阿部氏は説明すると。公平に捉えていくべきだと言って、阿部氏は勿論自分の信奉するパラダイムというのを持っているわけです。そのパラダイムというのは結論から言うと創造論です。東京工業大学の名誉教授の人の言葉です。

もう一つは、この人もクリスチャンで国立の徳島大学の教授で分子生物学専攻の高浜 洋介さんという教授です。彼も進化論を否定する有名な学者です。「依然として進化論が大きく取り上げられ、進化が最初には仮説として紹介されながらいつの間にか事実であるかのように記載されていく恣意性には疑問を感じます。一体誰が 35 億年前やカンブリア紀に行って当時の生物を実際に観察して来たと言うのでしょうか。進化論教育は、結果と考察とを分別して考えることを教える理科教育の基本姿勢と矛盾しています。」常識の範囲です。誰でも分かることです。

次に京都インターナショナル・ユニバーシティの名誉教授で安藤和子という人、理学博士です。この人の本は MGF の必読書の 1 つに入れています。『ダーウィン・メガネをはずしてみたら』という本なので、誰にも分かりやすい本です。日本のクリエイション・リサーチ・ジャパンという創造論のミニストリーの最近まで会長を務めていた人です。今でも顧問か何かをやっていると思いますが、その安藤和子さんという人も世界一流の方ですが、彼女もそういう本を書いていますし、またブログやそのクリエイション・リサーチ・ジャパンの方に出しているいろんな記事によって、如何に進化論が成り立たないかということ。創造論の方がむしろ論理的で妥当であるかということを立てるような記事を定期的に出しています。

最後に埼玉医科大学の心臓血管外科医で准教授でもある医学博士の今中和人さんの書いた本も最近出ています。『心臓外科医が語る驚異の人体』という本です。その中にも心臓外科医として、埼玉医科大学の教授として専門的なことも書いていますけれども非常に分かりやすい内容となっています。彼は、聖書は正しく進化論は間違いだということをハッキリ言っています。それをクリスチャンは堂々と説明するべきだとチャレンジしています。「人体の組織は観察すればするほど段階的に進化してきたとは考えられず、最初から全部できなければならないことばかりであ

る。進化論についてはでたらめの新興宗教である。」と、そこまで言い切っています。ですから生物学者であろうと、また人体を取り扱う医学博士であろうと、また天文学であろうと、ありとあらゆる物理学や化学の専門家たちが口を揃えて「進化論は何の根拠もないでたらめな妄想に過ぎない。」と。精神医学の立場で言っても、その進化論というのは精神分裂病の人の妄想に過ぎないと。そういうものだという事は大体皆さんには伝わったかと思います。

今お話ししたことはもうずっと聞くだけであまりじっくり考えることにはならなかったかもしれませんが、一応皆さんの目を開くためにいろんな専門家たちの言葉も参考にしながら、私たちが普段から聞いていること、教えられてきたこと、それがどんなものであったのかということを考えて頂くために、あえて少し冗長ではありましたが、長い引用とか多くの人たちの言葉を紹介させて頂きました。

最後に、今から皆さんに考えて頂きたいことを提示したいと思います。それはダーウィン主義と言っても良いと思います。そのダーウィン主義とその基礎になる自然科学、自然主義と言っても良いと思います。進化論を信じている人たちのその主張するところ、彼らが事実と信じていることはどういうことか。いくつかポイントを挙げますので、皆さんもノートに取るなりして、また考えて頂きたいと思います。これは大半の日本人の人たちが実際に信じている、信じているということです。進化論を信じているという人は、無神論という人は、こういうことを実際に事実として受け止めている。こういうことを考えている。こういう主義を持っているというふうに捉えて頂きたい内容です。

まず第一に、**すべては無から誕生する**。無から誕生するというのは、所謂創造主が無からすべてを造ったという意味ではないです。偶然に創造主抜きで勝手に生じたということです。誤解のないようにして下さい。

第二に、**非生命体が生命を生み出す**。無機質なものから有機物が生まれると言っているわけです。

**無作為や任意により微調整された状況が含まれる**。でたらめから生まれたのに、いつの間にか微調整された秩序だとか法則が数学的に素晴らしく並んだ。遺伝学の情報がすべて、百科事典が何百冊もあるような情報が勝手に偶然にできあがったという立場です。

**無秩序状態から情報が生まれる**。これも同じことです。

**無意識が意識を生み出す**。

**理性のないものから理性が生まれる**。

以上です。これが、ダーウィン主義の人たちが信じるものですが、どれひとつとっても無知な妄信に過ぎないと。でもそれが進化論者の人たちが実際に事実として信じ受け止めていることなんです。創造論なんていうものは馬鹿らしい。**創世記 1～11 章**が文字通り歴史としてあったなんていうことを真面目に信じている人はおかしい、という人たちの立場です。これは勿論唯神論者を名乗る、キリスト教を名乗る自由主義神学の人たちも同じです。彼らは**創世記**、特に **1～11 章**を創造神話だと公言してはばからない人たちです。実際に彼らの書いている創世記の説教だとか、文献を読んでみて下さい。全部作り話、寓話扱いです。神話扱いであって、インターネットにもいろいろ出ています。〇〇教団の××牧師が創世記の連続講解説教をしていますとあって、それがインターネットに全部載っているんですけども、でも読んだら**創世記 1～11 章**は創造神話であると。こんなものを文字通り信じるのはおかしいみたいなことが書いてあります。そうであるならば、**イエス・キリストが創世記を文字通り信じている**ことをどう説明するのかということになるんですけども。これは冒頭にも言いましたけれども、特に**マルコの福音書 13:19**を開いてみて下さい。しっかりここに印をつけて下さい。イエスの言葉です。『その日は、**神が天地を創造された初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日だからです。**』世の終わりが来るということを預言されていますが、『**神が天地を創造された**』とイエス・キリストが断言しているんです。“**神が**”です。創造主が居られて。否定していません。「そうでは無い、これは進化論ですから無から全部生じたんです。」とはイエスは言っていない。「非生命体が生命を生み出したんです。」とはイエスは言っていない。「無作為や任意により微調整された状況が生まれたんです。」とはイエスは言っていない。「無秩序状態から情報が生まれた。」とはイエスは言っていない。「無意識が意識を生み出す。」とも言ってませんし、「理性のないものから理性が生まれる。」ともイエスは言っていない。

また同じくマルコの福音書 10:6。これもイエスの言葉です。『しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。』「進化の初めから、神は、人を猿から造られたのです。」とは書いてありません。しかも男と女とに造られた。男と男ではないです。女と女ではないです。アダムとスティーブ (Steve) じゃないです。アダムとイブです。これを信じたくない人は、「性同一性障害です。元々体は男でも中身は女です。元々体は女でも中身は男です。生まれつきなんです。」違います。その性同一性障害は病気だと言っていますが、それにも何の科学的根拠もありませんから騙されないで下さい。一つの根拠もないです。でも、如何にもそれが科学であって医学であって、それを認めないということは非科学的であるなんていうのは、真っ赤なウソですから信じないで下さい。未だに性同一性障害なんていうものは科学的には証明されていません。生まれつき先天性にそういう障害がある、病気がある、自分のアイデンティティーが体とは違う、なんていうことは証明されていません。これはこれから先も証明されません。聖書にハッキリ『神は、人を男と女に造られた。』と、そう書いてあるからです。

話をまた元に戻したいと思いますが、イエス・キリストが創造論者であるということを私たちは聖書から知ることが出来ます。イエス・キリストは**創世記**を字義通り信じたお方だということがハッキリ見て取れます。なのに、イエス・キリストを信じるとしているクリスチャンの一部の人たちが、日本ではメジャーの多くのプロテスタントの教会が「否、創造論なんていうものは非科学的であって、進化論を私たちは信じるべきだ。」と。カトリックも残念なことについて最近進化論を認めていきましたけれども。でも、これを認め始めたどうなのか。もう同性愛だって否定出来なくなります。妊娠人工中絶も、これも否定出来なくなります。偶然に生じたわけですから、別に墮胎したって何の咎めもないわけです。別に偶然の産物ですから、男でも女でもどっちでもいいわけです。そこには倫理だとか道徳という基準なんてものはありません。神が定めた、例えば基準である十戒。「十戒なんか守る必要ない。これを基準にする必要なんかないんだ。」という話になるわけです。

ですから創造論者のケン・ハムという人は「**クリスチャンの進化論者は、聖書の権威を見下している。**」と言っています。自称クリスチャンの進化論者は、**聖書の権威を見下している。**その一言に尽きます。もっと言えば、その人はイエス・キリストを馬鹿にしています。「イエス・キリストは知らなかったんだ。ダーウィンの方が良く分かっているんです。我々はイエス・キリストよりもダーウィンを信じているから。だから進化論者でありながらクリスチャンであって、私たちは聖書を字義通り信じるような妄想を抱いている知的レベルの低い幼稚な単純なクリスチャンたちとは違うんだ。我々自由主義神学の人の方がよほど聖書のことが分かっている専門家である。」と。気を付けて頂きたいと思います。ですからハッキリ言いますと、聖書を字義通り信じているクリスチャンの方が少ないです。そして、そういう人たちは馬鹿にされます。原理主義者とか、ファンダメンタリスト、根本主義者、危険な思想を持っている人たち、全く盲目で偏見に満ちて排他的であって非寛容的である。そういう知的レベルの低いトラブルメーカーだと。それが実際のイメージだということです。そのようにして MGF の教会に集っているひとりひとは世間から見られているということを知って下さい。それが嫌だという人は他へ行って下さい。日本で最大のプロテスタントのグループである日本基督教団をはじめ主流派と呼ばれるグループ、全部進化論を信奉しています。「創造論なんていうものを信じているのはおかしい人たちだ。」というのが彼らの認識であります。クリスチャン同士なのに、とあなたは思うかもしれませんが。「別に進化論を信じていたって、クリスチャンだったら良いじゃないですか。」と。今日のこの話を聞いて皆さんはそうは思わなくなったと思います。確かに救済論とは違います。救済論というのは、イエス・キリストを唯一の救い主として信じ受け入れるということなんですけれども、でも進化論の立場では、実際にはその救済論ですら歪められてしまうということです。そして進化論の立場では、クリスチャンとしては聖書的に生きることは出来なくなります。もうそういう人たちは聖書を読まなくなります。実際にそういう進化論を信奉している教会に行ってみて下さい。そこの信者たちは聖書をろくに読みません。礼拝に行ったところで聖書すら開かれないうです。聖書なんかどうだっていいものです。参考までに読む本でしかありません。そうなっていったら教会は墮落の一途を辿っていきます。それが世の終わりの傾向だと、イエス・キリストが預言しているんです。教会は世の終わりになったら背教すると。ですから同性愛者も受け入れられていって、そして同性愛者のレズビアン牧師だとか、日本にも増えています。

この教会で同性愛者は否定しますが、同性愛者のライフスタイルを送っている人たち、同性愛のセックスをする人たち、彼らは罪を行っているとは断ずることはいたしませんけれども、だからといって彼らを受け入れない・排除することは致しません。その人たちは他のどの罪人とも変わらない人として私たちはこの教会に歓迎します。ただし、同性愛者として認めていくわけにはいきません。それは罪だとして、その罪は克服出来るものであり、その罪は必ずイエス・キリストによって贖われ、清められ、そして本来の創造時の神のかたちちゃんと修復出来る、回復出来るものとして救いを提供していきます。そういう同性愛者と呼ばれる人たちは、嘘つきと何ら変わりませんし、物を盗む人と何ら変わりません。税金をごまかす人とも変わりませんし、不倫をするような人とも何にも変わりません。偽善者と何にも変わりません。私たちと同性愛者の差は何もないということです。ただの罪人であります。でも、その罪を肯定すること、積極的に認めていくということ、聖書の真理を否定してまで捻じ曲げてまで同性愛者は受け入れるべきだというその考えには、真っ向から反対します。そういうことで私たちは聖書の権威を重んじている者だということです。

もう一つ、進化論が事実であれば以下の5つの結論が導き出されるということ。これを言っているのは実は進化論者です。高名な世界的に有名な進化生物学者で歴史家であるコーネル大学の教授です。ウィリアム・プロバインという人です。ノンクリスチアの進化論者がこう言っているんです。「**進化論が事実であれば第一に、神に関する証拠は無い。第二に、死後の世界は無い。第三に、善悪に関する絶対的基準は無い。第四に、人生に究極の意味は無い。第五に、人間に自由意志は無い。**」これが進化論が引き出す結論です。「神なんか信じない。」当然です。進化論ですから。目に見える神なんか信じない。それは人間がつくりだした産物だと。「死後の世界なんか無いんだ。死んだらただ消えるだけ。」何も無いんだと。「善悪に関する絶対的な基準なんかありません。同性愛が罪だとかなんていう、そんな偏見は持たない。みんな受け入れるべきだ、寛容であるべきだ。」と言いながら、同性愛は罪だという意見は寛容さをもって受け入れないわけです。矛盾しているわけです。聖書を絶対的な基準だと信じる人の意見は認めないんです。寛容さをやたら訴える人たちに限って、クリスチアに対しては最も非寛容的な人たちだということを知って下さい。彼らは口先だけの人たちであります。「人生に究極の意味なんか無いんだ。」だから自殺するんです。だから生きていて空しいんです。「人間に自由意志なんか無いです。」認めたくないかもしれませんが、でもこれが進化論の引き出す結論です。自由意志なんか無いです。もう決定づけられている。適者生存です。自然淘汰です。自由意志なんか無いのです。弱い者は滅び失せる。「元々私たちは動物ですから、とにかく沢山の種を残さなければいけない。」男の甲斐性だと言ってあちこちでいろんな女性をつくるわけです。進化論で言えば、それは正しいことで立派なことで強者としてやるべきことです。それが成り立つんです。そういう夫を持ってあなたは「ひどい人。」進化論者ならそれは言えないわけです。むしろあなたの夫は強者ですから、どんどん外に出て行っているんな女性と関係を持って、沢山子孫を残す。それが進化論ではむしろ良いことです、正しいことです。強い種を撒いて、多くの強い子孫を残していく。そして、進化論者ならば、それをあなたは応援しなければいけないんです。そこには何か基準は無いわけです。

そういう生き方をしたいんですか、というのが最後に聞きたいことです。正直に、そのような生き方をしたいんですかと目を見て問うたら、いくら進化論を信奉する人でも「否、それは嫌です。」と言うに決まっています。いきなり殴りかかってみて下さい。なぜ殴るのですか、と思うと思います。でも良いんです、別に絶対的な基準は無いんですから。「殴ってはいけない理由なんかあるんですか。」と聞いてみて下さい。「強い者が勝って何が悪いんですか。」と聞いてみて下さい。動物が他の動物をかみついたって、別に何の問題もないです。人間はそれを見て、いけないと思うだけです。動物は別に強いものがかんだって、それが別に悪いことにならないわけです。でもそうやって進化論教育が成されてきたので、子供たちはまるで動物と一緒にです。教室の中で秩序なんかありません。学校の先生の言うことなんか聞かなくなつて良いわけです。好きに話して、先生が教えている時でも席を立て勝手にトイレに行ったり、勝手にその辺をうろうろしたり。何の基準もないです。「先生の言うことを聞かなければいけない。なぜそんなルールがあるんですか。」進化論ではそういうルールすら関係ない話です。道徳も倫理もないわけです。子供には何一つ

正しいことを、善悪の判断というものを教えることは出来ない、これが進化論です。そして、そういうところに皆さんは子供や孫を送り出しているんです。朝から晩までマインド・コントロールさせているんです。よくよく考えてみて下さい。「義務教育だから仕方がないです。働いていますし、パートだし、自分が育てることなんか出来ませんし、そんなことを教えられません。」逃げているだけです。あなたが本当に自分の子供を愛しているなら。学校に行かせることを私は別に否定しませんけれども、そこで何を彼らが聞いてくるのか、教え込まれて、刷り込まれてくるのか、ちゃんと知って頂いて、皆さんは親として自分の子供に対する責任を果たして頂きたいと思います。先生が教えていること、学校で教えていること、それがすべて正しいわけではないということです。新聞に書いてあること、雑誌に書いてあること、インターネットに載っていること、テレビで言っていること、NHKですら全部正しいわけではないということ。聖書というものがどれだけ正しいもので、信じるに値するものかということとをさらに上から刷り込んで下さい。上塗りして下さい。学校の時間よりも、もっと時間をとる必要があるということを私は言いたいだけです。学校に行かせていることが問題だとして、実際に学校に行かせないという選択肢も勿論あります。ホーム・スクーリングという選択肢ももう昔からあるわけです。クリスチャンだけじゃなくて、ノンクリスチャンでもそれをしています。でも、学校に行かせたって全然構いません。親としてちゃんと言うべきことを言う、教えるべきことを教える。そうすれば子供は判断出来ます。でも判断材料も無いまま、聖書に反することばかりずっと朝から晩まで、小学校6年間、中学校3年間、高校3年間、ずっと朝から晩まで教え込まれるんです。そして大学に入ったらなおのこと、そこはもう無神論の社会です。神なんか居ない世界です。そこであなたは親として一生懸命働いて汗水たらして学費を稼いで、教育ローンまで組んで、高い家賃まで払って、食費まで払って、アルバイトなんかさせまいと、勉学に勤しむように、集中出来るように、遊び呆けないように、一生懸命働いて必要を満たして、そしてすべてつぎ込んだものがどうなっているのか、よく考えて頂きたいと思います。大抵のクリスチャンホームの子供たちは、大学に入った途端に信仰を捨てます。幼い頃は教会と一緒に通っていたのに、大学に入った途端に「神なんか居ない。教会なんか行っている時間は無駄である。そんなファンタジーは阿呆らしい。そんなものを真剣に一生抱えたまま、信じ込んだまま生きていくなんで、人生の無駄である。」と、そういう結論を出します。それは必然であります。大学というところはそういうところだからです。「否、でもうちの子はキリスト教系の大学に行かせました。」残念でした。そこでは進化論教育がなされていますから。「聖書も教科書として使うんです。」そうです、ただの教科書です。神の権威の書としては渡されません。読んでも読まなくても、信じても信じなくてもどちらでもいいものです。ですから、人のせいになしないで下さい。教育機関のせいになしないで下さい。社会のせいになしないで下さい。これは教会の責任です。これは私たちクリスチャンの親としての責任です。それを私たちが果たしていないから、この社会はどんどん腐敗していきんです。社会が悪いとか、個人が悪いとか、そういう問題ではないということです。

時間も大体これで来たので終わりにしたいと思いますけれども、アドルフ・ヒトラーは600万人ものユダヤ人を虐殺したホロコーストの責任を問われる人として皆さんも知っていると思います。悪名高いファシズムの申し子。そのヒトラーが進化論の信奉者であるということは冒頭に皆さんにお伝えしました。人類学者のアーサー・キースという人は、『進化論と倫理』という本の中で「ヒトラーはユダヤ人迫害においてダーウィン進化論の原理を厳格に当てはめていた。」と説明しています。ですから、ヒトラーはダーウィン進化論の原理主義者だったということです。文字通り厳格に進化論を信じて実践した人です。それが結果としてホロコーストを生んだわけです。「進化論的手法と民族主義の道德観が偉大な近代国家に精神的に適用された例を見るためには、1942年のドイツに戻らなければならない。ヒトラーは進化論が国策のために唯一正しい真の基盤であると心から信じきっていた。ヒトラーは彼の人種と(白人のアーリア人です。)民族の運命を保証するために組織された虐殺という方法を採用し、ヨーロッパ全域を血の海にしたのである。このような行為はいかなる倫理的基準に照らし合わせても極めて非道徳的なはずであるが、当時のドイツはそれを民族主義の、或いは進化論の道德と一致させることで正当化した。ドイツは進化の歴史を逆戻りし、進化の過程に見られるべきむき出しの残忍性を世界に実演してみせたのである。」

また、T・ホフマンという人は『ヒトラーの安全保障』という本の中で「ヒトラーは他人を支配し優位に立つために闘

争することが、ダーウィン進化論に基づく人生原理としてすべての人に課せられていると信じていた。」と述べています。ヒトラーは生粋の進化論者であったということです。生粋の進化論者になれば必ずヒトラーになるということです。「私たちは考えれば考えるほど、ヒトラーに似ているんだ。」ということを行ったアメリカの神学者がいます。R.C.スプロールという人です。憎き人物、ヒトラーがどれほど酷い人間かということは、大抵の人は知っていると思いますけれども、でも考えれば考えるほど私たちはヒトラーに似ていると。

もう1人だけ、本当にこれは最後の最後です。ジェフリー・ダーマーという人の名前を聞いたことがあるでしょうか。皆さんの世代だったら聞いたことがあると思います。世界を震撼させた人です。1978年から1991年にかけて17人の男性を猟奇殺害したアメリカの連続殺人犯です。彼は同性愛者でした。彼の生き立ちを見ると非常に不幸な生き立ちだということは分かるんですけども、だからといってそんな酷い犯罪になるのかということを疑問に思う人もいると思うんですが。実際に彼は男を殺したんです。同性愛者ですから。薬とかを飲ませて殺すのですが、殺した後犯すのです。肛門セックスをするわけです。そして死体を切断して、その肉を食べるんです。バラバラにして冷蔵庫にいっぱい詰めて、それを食べていたわけです。彼の手記にはこうあります。「もし人間が、責任を問う創造主は存在しないと考えるなら、もしそうであれば自分の行いを改めて受け入れられるように振る舞わなければならない理由はどこにあるのか。とにかく私はそう考えた。私は常に進化論が真理だと信じてきた。それは、私たちすべてはべとべとした泥から出現したに過ぎないという考え方である。そして私たちが死んだら、それで終わり。何も無い。」このジェフリー・ダーマーは同性愛者で、そうやって猟奇殺人を繰り返したんですが、彼は進化論が真理だと、そのように信じきって、自分のしている行為は何の間違いもないんだと。進化論で言えばそうです。しかし彼は刑務所でイエス・キリストに出会ったんです。イエス・キリストによって彼はボーン・アゲイン・クリスチャンになりました。そしてこう言っています。「しかし、主イエス・キリストこそ真に創造主であると信じた時から、他のすべての人同様、すべての責任を創造主が負って下さると信じている。」彼は聖書を読んで刑務所でクリスチャンになっていくんですが、でもその刑務所内で囚人からリンチにあって、刑務所内で彼は死んでしまうわけです。でも彼はイエス・キリストを信じたので、天国に行ったわけです。進化論を信じていたら、どうなっていくのか。なれの果てがヒトラーであり、ジェフリー・ダーマーです。でも、ジェフリー・ダーマーに関しては、最後に刑務所で聖書を通して創造主に出会ったんです。進化論という考え方が全く間違っていたということに気付いて、そして創造主はイエスだということに気づいて、イエス・キリストによって彼の人生は全く変えられたんです。それがすべてを証明すると思います。

どちらの信仰体系が信じるに値するかどうか、妥当かどうか。どちらの偏見があなたの選択になるのか。進化論ですか、創造論ですか。科学 対 宗教の対決ではありません。宗教 対 宗教の対決です。偏見 対 偏見の対決です。偏見はすべて悪いものではないです。1+1=1、偏見です。でもそれが悪いとはだれも言いません。「2 だっていいじゃないですか。田んぼの田だっていいじゃないですか。」違いますね。ですから、キリスト教は真理に基づいた宗教です。そこには唯一無二の神が君臨されています。創造主が私たちの責任を負って下さるお方です。ジェフリー・ダーマーはそれに気付いたんです。同性愛者であって、17 人もの子供を含めた男を殺して、レイプして、体をバラバラにして、その肉を食べたような人物です。そんな彼が、もう動物と同じ、動物以下のその彼がイエス・キリストに出会って、まともな人間に変えられたんです。彼のインタビューなんか動画で見ることできます。彼の書いた本は今でも勿論あって、読む人もあります。父親が勿論その本を管理しているんですが、その本の収益は被害者に充てられたり、また創造論のミニストリーにそれが寄付されています。この創造論に触れることによって、第2、第3のジェフリー・ダーマーが生まれまいよということ。これが普及すれば、ジェフリー・ダーマーのように空しい人生を送っている人たち、自分は動物以下だとか思っていない人たち、何の希望もなく、ただ欲望に駆られて、最後はべとべとした泥にはまって死んでいくだけのそんな空しい人たちの人生を変えるために、その**創世記**をベースとした創造論というものが説かれていく必要があるということです。

今日はこれで終わりたいと思いますが、序論はこのぐらいにしたいと思います。まだまだ話したいところはあるんですけども、実際に創造論を扱っているミニストリーとか、創造論に関する書籍とか、ビデオとか、いっぱいあります。

そちらに譲りたいと思います。ですから、私は別に専門家でもありませんし、ただの羊飼いなので私はこの辺できっかけ作りをして、後はそういった専門書とか、専門家のいろんなミニストリーに譲りたいと思いますので。教会にも沢山そういう書籍があります。必読書の中に『ダーウィン・メガネをはずしてみたら』というのがありますが、それは本当にもうノンクリスチャンでも読むことの出来るものですが、もっと一般的なものもありますし、専門的な内容のものもあります。私もたぶん 20 冊ぐらいは持っていると思います。もし読みたい方は言って下さい。そしてビデオも出しています。非常に優れたビデオも、YouTubeで見れるものもあると言いましたけれども、DVDとなって見れるものも教会図書にもあります。是非それを見て下さい。万物の起源とか、非常によくまとまったものです。カルバリーチャペルの関係者の人も携わっていますし、私はそういうものを見て、講義を受けて学んできましたので、お勧めしたいと思います。そういった推薦図書とか、推薦 DVD というものもまた改めて紹介させていただきますので、リストにしてどこかに貼りますから、それを見て購入するとか、教会にあればそれを借りて、是非目を通して下さい。触れて下さい。本が読み辛いという人は DVD が良いと思います。ノンクリスチャンの家族と一緒に見るのも良いと思います。いろんなアプローチがありますから、クリスチャンを対象としたものもありますし、ノンクリスチャンを対象としたものもありますので、是非それを取り入れて欲しいと思います。もっともっと土台作りに役立てて欲しいと思います。では今日はこれで終わりたいと思います。